職業・学問体験プログラム（生徒企画）
社会国際系　映画上映会・監督講演会

【日　時】　平成 28 年 1 月 10 日（日）
【内　容】　映画「イラク チグリスに浮かぶ平和」上映会・監督講演会
【目　的】　イラク戦争開戦からの 10 年間のあるイラク人家族の生活を題材とした映画を鑑賞後，監督本人から自身が経験したことやその時の思いを語っていただき，現在の中東を取り巻く情勢に日本人としてどのように関わるべきか，正しい平和とは何なのかを考える機会とする。
【講　師】　映像ジャーナリスト 綿井健陽 氏
【場　所】　ぎふメディアコスモス　みんなのホール
【参加者】　180 名（岐阜高生 55 名，保護者・職員 44 人，一般参加者 81 人）
【日　程】　12：30～14：30　映画上映会
　　14：45～16：15　監督講演会
【企画運営】　平成 26 年度第 1 回アメリカ研修参加者 38 名
　　生徒代表：稲葉智（2 年生）・中島優香（2 年生）・宮嶋倫（2 年生）

◆講師プロフィール

1971 年大阪府生まれ。映像ジャーナリスト・映画監督。日本大学芸術学部放送学科卒業後，98 年からフリージャーナリスト集団「アジアプレス」に参加。

これまでに，スリランカ民族紛争，スーダン飢餓，東ティモール独立紛争，米国同時多発テロ事件後のアフガニスタン，イスラエルのレバノン攻撃などを取材。イラク戦争では，2003 年から空爆下のバグダッドや陸上自衛隊が派遣されたサマワから映像報告・テレビ中継リポートを行い，それらの報道活動で「ボーン・上田記念国際記者賞」特別賞，「ギャラクシー賞（報道活動部門）優秀賞」などを受賞。2005 年に公開したドキュメンタリー映画『Little Birds イラク 戦火の家族たち』は，国内外で上映され，2005 年ロカルノ国際映画祭「人権部門最優秀賞」，毎日映画コンクール「ドキュメンタリー部門賞」)，「ＪＣＪ（日本ジャーナリスト会議）賞」大賞などを受賞。今回上映の映画『イラク　チグリスに浮かぶ平和』は，2014 年から各地で上映中。「2015 フランス・ＦＩＰＡ国際映像祭」で特別賞を受賞。

◆映画『イラク チグリスに浮かぶ平和』について

大量破壊兵器保有を口実に，2003 年３月の米英軍によるバグダッド空爆から始まったイラク戦争。これまでに 10 万人以上のイラク人が命を奪われた。2011 年にオバマ米大統領が「イラク戦争終結」を宣言し，米軍はイラクから撤退したが，いまなお混乱は続き，2014 年８月に米国はイラク北部を再び空爆した。おびただしい死者と引き換えに，イラクの人々が時折抱いた希望は浮かんでは消え，“イラクの春”は，砂塵と爆音のかなたにかすむ。日本も支持した戦争は何をもたらしたのか？　2013 年３月，ジャーナリストの綿井健陽は，これまで出会ったイラク市民の写真を手にバグダッド市街を走り回っていた。開戦前夜，空爆，米軍による制圧と占領，宗派抗争，爆弾テロ……様々な局面を取材し続けてきた綿井監督が，彼らの人生の「その後」を追い，戦乱の 10 年を描き出す。〔公式 HP　www.peace-tigris.com より〕

◆企画・運営した生徒の感想

（稲葉智君）　本プログラムを企画した私たち２７名は，昨年３月の第１回アメリカ研修に参加したメンバーです。シカゴ，ワシントン，ニューヨークを訪れ，様々な出会いと経験を積んできました。その中で 2001 年９月のアメリカ同時テロでハイジャックされた旅客機が突入し崩落した世界貿易センタービル跡地「グラウンド・ゼロ」を訪ねましたが，ほとんどの生徒が当時３歳前後で起こったテロのこと，その後のイラク戦争，現在のアメリカとイスラム社会の様子を知りませんでした。最近では，さらに混沌とし，パリでの同時多発テロや，IS による問題が世界各地で発生しています。そこで，この映画「イラク　チグリスに浮かぶ平和」をとおして，戦争とは何なのか，本当の平和とは何なのかを考える機会を作りたい，そしてそのことを多くの人に知ってほしいと思い，企画しました。

この講演を聞いて，綿井監督の「戦争は破片である。」という言葉が非常に印象に残りました。戦争で使われる武器で直接殺されるよりも，その武器によって家などが壊されその破片に押しつぶされたりして死んでしまう方が多いということでした。しかし，その言葉の意味はそれだけではないと思いました。人が殺されるのは戦争中だけでなく，戦争が終結した後も政治が安定せず，治安も悪化し多くの人が殺されてしまいます。たとえ終結宣言をしても戦争は終わらないと感じました。終結宣言が出されたからといって，安心してはいけません。その後，いかに現地の人を支援するかが大切だと思いました。

この会を計画した中で一番不安だったのは，一般の方が来てくれるだろうかということでした。岐阜高校の外で一般の方を招いて会を行うということは今までになく，初めての試みだったため，何人ぐらいの方々が参加するのか全く見当がつきませんでした。しかし，当日は 80 人を超える方に参加していただき，自分たちの希望の一つであった少しでも多くの人に知ってもらうということが達成されたと思います。今後も，国際平和について自分自身考えていきたいし，世界の様々な動向に注目していきたいと思います

（中島優香）　講演会の中での，「私たちは何をしてはいけないか，させてはいけないか」という綿井監督の言葉が印象的でした。国民が戦争をしない，させない政治家を責任を持って選ぶことが大切だと言われました。私は，戦争を始めることができるのも終わらせることができるのも結局国の責任者達だと思います。来年には私たち高校生にも選挙権が与えられます。自分の入れるこの一票が，日本，そして世界の真の平和につながるのだという意識を持って投票したいと思います。また，今回，自分たちで企画した職業・学問体験プログラムでしたが，やってみると色々な事に気づくことができました。アンケートを書くための鉛筆ひとつにしても，展示物の置き場所ひとつにしても，全て，しかも細かいことに気を配らないといけないということが分かりました。この先もこのような機会があるなら，必要なのは（グローバル）リーダーだと思います。リーダーには決断する力と共に。周りに気を配る力も要る，と昨年度のアメリカ研修以来思っています。これから研修に行く 1，2 年生にもそれを感じてほしいです。

◆講演内容

私は 1997 年から取材活動を始め，2003 年からイラクの取材を始めましたが，イラクにとって日本は特別な存在のように感じられました。1960～1970 年代に商社や建築関連の仕事をする多くの日本人がイラクのバクダッドに住んでいました。1980 年代には日本人コミュニティが１万人規模となり，遺跡観光などでイラクを訪れる日本人も多くいました。また，日本人が作った道路もあり，イラクにとって当時は，日本は身近な存在になっていたようです。湾岸戦争以降，2003 年にイラクを訪れた際には，イラクの人から声をかけられるときに「あなたは日本人か？」と聞かれることがほとんどでした。しかし，2013 年にイラクを訪れたときは声をかけられても以前のように日本人か聞かれることはなく，中国人，韓国人かと聞かれるようになりました。バクダッドの街には中国製，韓国製の電化製品が多く見られたことから，中国や韓国がイラクにとってより身近な国になったのだろうということが推測できました。そして日本に対するイ

メージとしては，素晴らしい人ばかりなのに何故爆弾を落とすアメリカ側にいるのか，と日本人に親近感を抱いている一方で，一体何をやっているのか疑問を持っているようです。場所は遠く離れていますが，いつも見られているのです。

私がこの映画を作った理由は，2013 年にイラク戦争が開戦して 10 年になるがテレビだと 1 回放送されると消えてしまう，そうではなくいつまでも残るものを作りたいと思ったからです。そして映画を作るにあたり，これまでに出会った人たちに再開し，そしてどうやって生きてきたか，言葉，表情，目線，仕草はどうか，亡くなった人はどうやって死んでいったのかを聞きまわりました。写真をアルバムに入れて街中を尋ね歩きました。昔は簡単に見つかったのですが，このときは思った以上に会えず，再開できても重傷を負っている人もいました。この映画の主人公のアリ・サクバンには絶対に会えると信じていました。彼には今まで沢山の不幸が起こっていましたから，もう不幸は起こらないだろうと思っていました。しかし，彼は数年前に殺されていました。イラクの人にとって人が死ぬということが当たり前になっています。誰でも１人は家族が殺されているのです。

私は空爆が始まって 1 時間ほど後，ミサイルの弾道を見ていたのですが，ペルシャ湾から発射されるミサイルがどこを経由して，どこで準備されているか知っているでしょうか。日本の横須賀や厚木からやってきているんです。日本のアメリカ軍基地が，中東の戦争の出撃拠点になっているのです。日本は間接的にイラク戦争において非常に重要な役割を担っていたのです。過去に沖縄国際大学に講話をしに行き，正門に着いた時にイラクで聞いた爆音と同じ音を聞きました。その時，普天間基地でイラク戦争の訓練をしていたのです。実際に知っていないと感じ取れないのですが，沖縄は戦場だと感じました。

私は同時多発テロ 1 年後にニューヨークを訪れて，イスラム教徒に「今度の９月 11 日はどんな日ですか？」と尋ねました。その人は「水曜日だ。」と答えました。聞き方が悪かったのかと思い，次は「今度の９月 11 日はあなたにとってどんな日ですか？」と尋ねました。それでもその人は「水曜日だ。」と答えました。「なぜ世界の人々はアメリカ同時多発テロの被害者だけを弔うんだ。中東ではそのような事件が，毎日のように，何回も起きて，多くの人が死んでいる。なぜそのことには見向きもしないんだ。」と彼は続けました。その時，ほとんどの人が世界で何が起こっているかを知っていないという事を痛感しました。世界で何が起こっているかを，知るため，伝えるために私は取材をするのです。（文責：稲葉智）

◆参加者の感想

- イラクのような地域に住んでいる人にとっては，政治には関係ないと言って済まされるものではない。自分たちの生活をもっとこうしたいと求めていることがよく分かった。（1 年女子）
- 私が 4 歳の時にイラク戦争は始まったからあまり記憶がない。学校では，教科書に太文字で書かれ，テストで年号や地図上の位置が問われるだけで，大きく取り扱われなかった。日本もイラク戦争に関わっていることを知った今，なぜ他人事のようになってしまっているのかという疑問が生まれた。（1 年女子）
- 私はこれからアメリカに行くまで，アメリカ同時多発テロ前後の国際情勢の変化について様々な方向から勉強していきたい。また，今の日本の国際世界における役割も政治的に考えたい。（1 年男子）
- 人々，特に一般市民が無差別に殺されてしまうのに，その事実は図やグラフ，死者〇〇人という情報だけで世界に知らされている。しかし本当に知らなければいけないのは，その国の実態や映像であり，それらを知り，改めて戦争について考えていくべきだと思う。（1 年女子）
- 近年では，集団的自衛権の行使容認によって，日本は戦争をするようになるのではないかという人々の危惧がある。2003 年当時，日本は間接的ではあるが戦争に関わっていたことを考えると，国際社会において日本は明らかに参戦国であるという認知がされており，その事実を我々が認識しておく必要があると思った。（1 年男子）

・日本人として何をすべきかということも大切だが，何をさせないようにすべきかも大切だ，という言葉が印象に残りました。18 歳から選挙権をもち，政治に関わるようになります。政治に興味を持って，しっかり考えて投票するべきだと思いました。（1 年男子）
・本当に困っている人の声を聞く機会を広げていく，知らせていくことも私たちにできることのひとつであると感じた。（岐阜高校保護者）
・誰と誰が戦っているのか分からなくなるただの殺し合いがなぜ起こっているのか？と世界中で考えなければならない。憎しみからは憎しみしか生まれないということ，戦争は遠い国の話ではないということに気付かされた。（岐阜高校保護者）
・戦闘機を 1 台購入する予算があるのなら，平和に生きるために外交努力にうんと予算を使うべき，そこに知恵と時間を費やすべきではないか。（一般参加者）
・今，日本も安保法など，戦争ができる国づくりへと大きく変わっていこうとしている。「何をするべきか」ではなく「してはいけないこと」をきちんと訴えていけるようにしたい。（一般参加者）

◆活動風景

新聞記者より取材をうける

ステージ裏での準備

会場での受付

上映前の会場

質問する本校生徒と答える綿井健陽監督

受付前の展示物

綿井監督を囲んで